

---

《RedBird》 ~ 血塗られた翼 ~

走りたくない人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

《Red Bird》～血塗られた翼～

### 【Nコード】

N3534Z

### 【作者名】

走りたくない人

### 【あらすじ】

「君は、僕の翼がなぜ真っ赤なのか知っているかい？」  
「僕の翼は、生まれた時から赤いんだ、この意味が分かるかい？」  
『生まれた時からもう、血で染まっていたんだ』  
赤い翼をもった少年は、いつしか『血の王』と言われた

## 始まりの翼

昔、ある女の子と遊んだ

彼女はとても可愛かった

とても見とれた

誰だつて、彼女に生えている真っ白なまだ小さい翼を見れば、  
見とれてしまう

僕は、「とても綺麗な翼だね」と言った

それを聞いた彼女は、振り返って恥ずかしそう

に言った

「あなたの翼の方が綺麗だわ」

彼女は言葉を続けた

『だつて、とても真っ赤なんだもの』

君には、白い翼

僕には  
.....

『  
赤血  
い  
翼  
』

どうしてこんなに赤いかって？

血で染めたと思う？

大丈夫、これは生まれつきだから、

そう、生まれた時から

『血で染まっていたんだ』

『血の王』

今日も、見たあの夢。

真っ白な翼をもった彼女、そして、真っ赤な翼をもった僕。

もう一度会いたいな

---

「起きてらっしゃいますか？レオン様」

「うん、起きてるよ」

待女のユリアが、いつものように僕をおこしに来る。

「もう、レオン様が起きられては、おこしに来る意味がないじゃないですか」

「ごめんごめん、でも、あまりユリアに無理をさせたくないんだ」

「べ、別に無理ではありません・・・（むしろ、良いです）」

「そう?」

「はい、でもレオン様こそ無理はなさらないでくださいね?」

「うん、分かってるよ、だからユリアも戻っていいよ」

「分かりました、では」

ユリアは心配性なのかな？そう思っているうちに自然に自分の顔が緩んでいることが分かる。

「さて、今日は調子がいいかな?」

そう言って僕は、魔法を使う。



「うん、今日は調子がいいみたいだね」  
「じゃあ、夜からでいいか」

僕は広間の方え向かった。

「レオン、おはよう」  
「おはようございます、ウィル兄様」  
「今日は体調いいのか？」

「うん、大丈夫だよ」  
「そうか・・・っと、早く逃げないとまたエミリアに抱き着かれるぞ」  
「そうだね、じゃ、一先ず退散するね」  
「ああ、気をつけるよー」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

「レオンんんんんんんー！！・・・ってあれ？レオンは？」  
「・・・逃げたぞ・・・」  
「そ、そんなあ・・・」  
「・・・エミリア姉様」  
「はっ！レオン！」  
「おはようございます、エミリア姉様」  
「おはよう！レオン」  
「エミリア、レオンをかまうのもいいけど、ほら、早くしないと学園に遅れるぞ」  
「で、でも・・・」  
「でもじゃない」  
「うっ・・・」  
「行ってきてください、エミリア姉様」  
「レオンがそういうなら・・・」

兄様と姉様は、学園へ出かけた、ただ、姉さまの瞳がギラついていた。

「レオン様、ベッドへお戻りになられてください」  
「うん、分かったよユリア」

夜まで暇な僕は、魔法の練習をしていた。

とは言っても、魔法なんて全部覚えちゃたし、意味ないんだけどまあ、問題といたら、魔法を使用する時なんだけどね。

僕は、人とは違うところがある。

一つは、上級の魔法を使うときは、夜でなければいけない。何故かというと、僕はまだ『覚醒』をしていないから。

夜は僕が魔法を活発につかえる時だからだ。

二つ目は……

僕には『<sup>血の</sup>赤い翼』があること。

生まれた時からあって、家族も、この家に仕えているもの、王達もそのことを知っている。

なぜ王達も知っているかって？

それは、僕が『血の王』だから。

これは、僕が生まれる前から予言されていた。

だから僕は受け入れた。

『血の王』になることを。

『血の王』（後書き）

次話は、待女のユリア視点です・・・

感想など、評価はいくらでも、受け付けていますので・・・

・・・ヨロシクです。

## ユリア視点（前書き）

スミマセン遅く、短くなりましたm ( ) m



## ユリア視点

「……ア……ユ……?……」

「……」

「ユリア!」

「……ヘツ?!」

「大丈夫?」

「ハ、はい!」

「なら、よかった」

「し、失礼しますね」

「あ、うん」

ガチャッ

「はぁ……」

ぼーっとしてしまった……

こんなところ、婦長のデリアさんに見つかったら間違いなく永眠だった……

それもまさか、レオン様に見惚れていたなんて絶対に言えない……

私はこのカトレット家に仕えてまだ、5年しか経っていない。

私の家、メーゲン家は代々カトレット家に仕えてきた。

何故なら、これがメーゲン家の仕来りだから。

おばあちゃんも、おじいちゃんも、母や父も兄弟たちも仕えている。

カトレット家の者はよく命を狙われる。

理由は二つある

カトレット家には、『始まりの本』があるといわれ、それは事実だ。カトレット家の先祖が最初の魔法の覚醒者であり、その者が直筆で創り上げた本だからだ。

その本を売ろうとすれば、価値が高すぎて値段もつけられないくらいだ

それを貴族や、賊などが狙っていて、カトレット家の者を人質にしようとしたこともある、が、

さすがに、最初の魔法の覚醒者の子孫達がやすやすと捕まるわけがなく、

捕まえようとする者が入院させられ、中には、十年間の入院をさせられた者もいたらしい。

なので、そんなこと当然合いたくもないので人質にしようとする者は、少ない。

二つ目のことは、これは最近のことで、

「レオン様」を殺す、狙う者がでてきたこと。

子供のうちから覚醒する者はめったにいない、しかも魔力の大きさが、考えられないほど巨大なこと。

そして……

なにより、『血の王』だということ。

『血の王』とは、世界を破壊する者、救う者。

大昔に一人の予言者が、こう言った、「『血の王』が生まれる」  
誰もがこの言葉を疑い、信じなかった。  
そもそも『血の王』が何か「知らなかった」からだ。

でも予言者の予言の後、世界に危機が来ることとなった。  
これまで、和解してきた魔族達が、魔物を操り、世界を自分たちの  
ものにしようとしてきたのだ。  
誰もが、怯え、苦しんだ。

そして、予言者は言った「『血の王』が世界を救ってくれるだろう。  
が、時に『血の王』は世界の破壊者となるだろう」

それを聞いた者たちは、予言者に聞いた、誰が『血の王』なのかを。  
すると、予言者は言った、

「背中に赤い翼を持つ者」

そしてその者こそ、「レオン・カトレット様」なのだ。

## 『覚醒』

これ以上とないくらいに白銀の髪は、月光に照らされるとその白銀の色が段々と赤く染まっていく。

そして、赤から真っ赤な血の色へと変化する。

真っ直ぐな、赤い瞳もその真っ赤な髪に合わせて色を変えた。

それはまるで、月が赤いのではないかくらいに見栄えていた。

そして、背中には触れば壊れてしまいそうな柔らかな翼、

でも、それは人が知っているのとは大きく違う。

何故ならそれは恐怖と思うくらい、血で染まった残酷で綺麗な翼だからだった

「じゃあ、行ってくるね」

「ああ、でも本当に大丈夫なのか？」

「お、お姉ちゃんは・・・、レオンがいないとダメなのおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお！！」

「・・・・・・・・」

「行ってキマス・・・」

僕が扉を閉める前にエミリア姉様の瞳が珍獣狙うような瞳をしてい

たことは気にしないでおこづ。

「さて、行くか」

僕はこれから、市場に行こうとしている。

久々に体調も良くなり、外出できるようになったので許可を取って  
みたらOKだったので出かけてみようと思った

兄様たちは、護衛をつけさせようとしたけど大丈夫と言い一人で出  
かけている。

「うーん、どうしようかな・・・」

外出したことがあまりないので、どうしようか迷う。

「ま、市場で姉様たちのお土産買っていけばいいか」

「確か姉様は、髪飾りがほしいとか言ってたな・・・」

「あ、あの・・・髪飾りをお探しでしょうか？」

独り言を言っているとそれが聞こえたらしく店の店員らしいの少女  
が声をかけてきた。

「あ、そんなんですけど、なにかいい髪飾りってありますか？」  
「え、えと希望とかありますか？」

ちなみに今僕は顔を大きなフードで隠している。

「希望ですか・・・あ、では、紫色とかそういう大人っぽいものってあります？」

「紫ですか？」

「はい、姉の瞳に合わせてみようかと」

「でしたら、このようなものはどうでしょう？」

少女から差し出された髪飾りは、紫色の蝶の柄がはいっており、想像しただけでエミリア姉様によく似合うことがわかる。

「いいですね、ではこれを」

「あ、ありがとうございます」

エミリア姉様の髪飾りを買つと、次々にお土産を買って、目的を果たした。

「そろそろ帰ろうか・・・な・・・！」

急に目の前が真っ黒のなり、視界を奪われた。

そして、首筋に冷たい感覚がした。

「大人しくしねえと、分かってるよな？レオン・カトレット様？」

「.....」

「そうそう、カトレット家の子供とわ言え所詮は子供だな」

耳元で男の声がする。

その言葉を聞いて、男の目的が分かった。

「早く、親分に見せてやろう」

「急げ、気づかれる前に連れて行くぞ」

違う男の声がした、どうやらグループ犯行らしい。

そのまま、乗り物らしいものに入れられ、しばらく揺れていると、それがピタリと止まった。

「さあ、親分に見せてやろう」

僕は抱えられ、視界も塞がれたままだ。

すると、すぐ傍でノックする音が聞こえた。

「親分、カトレット家の子供を連れて来ましたぜ」

「入れ」



扉の開く音がした

「ほう……、これはよくやったな」

「あ、ありがとうございます親分！」

「これで、始まりの本が手に入る……」

「にしても、よく簡単に捕まえたな？」

「気を抜いていたようなので」

「そうか……」

「所詮カトレット家の祖先も子孫もそんな程度か」

「ですねえ……」

カトレット家を悪く言っている――「所詮カトレット家の祖先も子孫もそんな程度か」――

「にしても、さっきからこの子供なにも言わないんですよ」

「きつと、怯えているからだろう、所詮カトレット家だしな」

――「きつと、怯えているからだろう、所詮カトレット家だしな」

その言葉で、僕の中の何かが外れたような気がした

\*\*\*

「ウィル様、エミリア様ご報告が」

「レオンがまだ帰っていない!？」

「それは本当なの!？」

「はい……」

「ああ、レオンが……」

その場で崩れ落ちるエミリア

「エミリア!？」

「エミリア様!？」

「デリア、エミリアを部屋へ」

「はい」

「……もう日は沈んでいるというのに……レオンの行方は？」

「聞き込みをした所、店で髪飾りを買ひ、そのまま店を出った所

しか・・・」

「それだけか・・・分かった、早急に父上と母上にそのことを報告をする」

「かしこまりました」

執事のロイが魔法を展開し、そこには、父ダリルと母メアの姿が映った

「どうした、ウィル、早急の用事とはなんだ？」

「実は・・・レオンが出かけたまま帰ってこないのです」

「！・・・それは確かか？」

「はい・・・」

「分かったわ、直ぐそっちに向かうわ」

「はい、お願いします」

「ウィル、エミリアはどうした？」

「あまりのことで、部屋で休ませています」

「そうか、ではそちらに行く」

そうダリルが言うと魔法で開かれたゲートから、ダリルとメアが出てきた。

「おかえりなさいませ、ダリル様、メア様」

「ああ、ただいま」

「レオンは？」

「店で髪飾りを買ってそれから行方が・・・」

「分かった、ウィルと私はレオンの搜索、メアとユリアはここに残

り魔法を使いレオンを探してくれ、  
何か分ければ、すぐ連絡をしるいいな？」  
「はい」

護衛の者も加勢し、レオンを搜索した。

\*\*\*

「や、やめてくれえ！」  
「……………」

男達のアジトには叫び声と、無数の死体とソレの血があつた、そして一人の血まみれの赤い翼を持った少年だけだった

「い、命だけはあ…！ぐエっ」  
「誰がお前なんか助けるか」  
「僕の家族を侮辱した罰だ」

グチャッグチャッ

ドスツザスツ

響きわたる、何かが壊れるような音

「汚い血がつちゃったじゃないか」

「ま、いつか」

「どうせ、同じ色だし」

グチュッブシヤッ

「汚いどうしてお前たちのちはこんなに汚いんだ？なあ」

「これが、お前たちの罪の代償だ」

「た、たす・・・？・・・」

グチャッ

「ああ、月が綺麗だ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3534z/>

---

《RedBird》～血塗られた翼～

2012年1月4日03時52分発行